

自蹊庵便り

令和三年 神無月

NO 153

「茶事の本旨とは」

この頃、なにかと茶礎ともいえる茶人達の声に心寄する日々が続いております。長期化のコロナ禍にあつて、書棚の片付などする時間もあるため、整理を始めたものの、結局は捨てる本など一冊もなく、かつて傍線を引いた箇所を読みふけるだけに終わってしまいました。

それはきつと私が、いつの間にか心の迷いの多くを抱えてしまっていることに起因するのでございましょう。

常にシンプル・イズ・ベスト、一服の茶にあつては最後は水指もなくてもよし。火と水、茶葉さえあれば、美味しい一服は点てることができる…と、旅から旅への托鉢も、このような思いからで、実に楽しい自由闊達、その時、その場の当意即妙のお凌ぎ料理を一服の茶で持て成す。この単純明解の中に身を委ねて人生の後半を歩んできたはずでした。

だからこそ齢を重ねるのが楽しみでした。八十路はどれほど身軽になっていることやら…と。

さあ…!!今はどうであろうか…。二年余りのコロナ禍で確かなものを口から入れることが命を守り、免疫力を高めますよ!!と。

発信力のあるオンライン講座を試み、茶事においては、茶道に励んでおられるどなたもが自分の身の丈にあつた楽しい一服の茶事が出来るように…と、京都にも茶事道場をかかえ、多くの人との出逢い、そのお一人お一人を決して悲しませてはならない、楽しく優しい一服に出会って欲しい…と!

日々の祈りにも似た一服はとてもシンプルなはずでした。そして、それは今もこの先も、少しも変わらないはずなのですが…。今、耳許で茶の礎を築いてきた茶人達やさやくのです。

きつと喜寿のお招き茶事を…と、一つの道を歩んできたけじめのようなもの、お世

話になった方々をお招きしたい…と云う、これとて単純明解なこと、先のことは判らないが、今なら体力もあり、今できることをすれば良い、自分が八十の声近くなつてみると、ぼろぼろさらさらとお世話になつた方々が逝つてしまわれる。

お礼の一服を…と思つている内に老人ホームに入ることになりました…等々とお葉書が届く、亡くなられてもコロナ禍でお別れも云えずじまい。あゝ、今しかない、一つの道を歩み来しも成長などという言葉のカケラさえも手応えなく、只、さらさらと一服を求め続けての今にございます。

茶の道にいそしみ、老いを重ねてきた人々は一様に声を揃えておつしやる。「冥土の土産にいい茶事に預かって死にたいものだ」と! はてさて、いい茶事とは何ぞや!

先日、重陽の茶事に御参加くださった殿方は、「茶事はやはり道具でしょう。お茶は道具の楽しみが一番」と仰る。本当にそう

です。道具を持つ力があればこそその楽しみ、歴史のプレミアの馳走、時の宝物、お金を出して買える道具、いくら積んでも時といふものは買えません、歴史のプレミアを買うことのできる不思議な世界。

身軽な茶事を心情としてきた私も、ここに至って心の余分を持たぬ自分と余分に心を遊ばせる技量の必要さも感じつつ、心のせめぎあいの押し問答が、ここ二、三ヶ月続いております。

そんな心境からか、茶礎達の残してくれた言葉が耳許から離れてくれないのかもしれません。

利休さんの百首にもありますように、

○釜一つあれば茶の湯はなるものを

数の道具をもつは愚かな

○かず多くある道具をも押しかくし

無きがまねする人も愚かな

(編集子注…この二首は百首にはないが、利休作と伝わる)

○茶はさびて心はあつくもてなせよ

道具はいつも有合にせよ

○茶の湯とはたゞ湯をわかし茶をたてゝ

のむばかりなる事と知るべし

またその意志をついだとも云える宗旦に至っては、

○茶の湯の善悪は道具所作によらず、貴賤貧富にもよらず、奇麗作前にもよらず、唯自得を肝要とし、心の至ると至らざるとによるべし。(『宗旦伝授』より)

○茶の湯は誠を以てはからへば、素直にゆたかなり、智恵を以てはからえれば、利根だてにて賤しとなり、茶の湯に願はしきは、少しなりとも知を棄て名利を厭ひ、心を研き人をうらやむこと勿れ(『宗旦伝授聞書』珠光さんは、

○所作は自然と目に立ち候はぬ様にあるべし。(『源流茶話』の御尋之事)

紹鷗さんは、

○正直に慎み深くおごらぬさまをわびといふ。(紹鷗わびの文)

如心齋さんは、

○茶の心は浅き味よし。例へば水の方円に従ひ又止まりもせず。何ともあらぬ所にこそと、淡きところを味わへとの心なるや。

茶事を理屈にはめ、むつかしく扱ふはよろしからず。

○茶の心持ちとて別になし。常に茶になし

て、茶の席に臨みあらたまらぬ様に、又、言葉などにあやをつけて虚のなき様にありたし。

その他、遠州さんも石州さんも不昧さんもみなさん教訓を残されており、先人達の言葉、有難く身に染みるばかりのこの頃にございます。

はてさて、いかなるお招き調いますことか。十一月は口切りにございますゆえ、先ずは挽き立ての一服をお楽しみ戴きましようか。

八十路近し あるがまゝなる

拙さも身に染みるほどに

秋深みゆく

鶴女 七十八歳

お知らせ(編集子)

本文にもありますとおり、十一月・十二月には喜寿の茶会を企画しております。そのため、今回は献立(十一月、十二月)を掲載いたしません。当日をお楽しみ。その様子、献立等については、次号以降に紹介してまいります。